
とある都市の薄幸少年[サッドボーイ]

Nino

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある都市の薄幸少年「サッドボーイ」

【Nコード】

N8319P

【作者名】

Nino

【あらすじ】

オリキャラを使ったとある〳〵シリーズの二次創作

はじめに

これはオリキャラのとある一人の高校生をメインに第三者からみた
とある〳シリーズの二次創作です

時系列、人物像等は原作を出来るだけ維持して行きます

国語力ないんでおかしい所があったら言っ下さい

また仕事の関係で更新速度はかなり遅いです

完結までのだいたいの筋書は出来上がっているので長い目でみて下
さい

疑問質問あったら書き込みよろしくです

この作品は別のサイトでも同じ内容で投稿しています

こっちは向こうが出来上がった場合に投稿します

序章 学園都市の高校生のお話 S t u d e n t ' s c i t y

ここは学園都市。総人口230万人の8割が学生という、学生だらけの街。総面積は東京都の約3分の1で23の学区に分けられている。

この街では日々超能力が『開発』されていて、殆んどどの学生は何かの能力に目覚めている。

そんな街に俺、神道 表裏「しんどう ひょうり」は住んでいる。表裏っていう名前の由来は裏表のない人間になってほしいからだ。そうだ。

この街では珍しく何の能力にも目覚めていない無能力者「レベル0」で、能力開発のカリキュラムを受けていること以外は外の普通の高校生と殆んどなんら変わらない。

学園都市には中学校に上がる前にとある都合で入り、それまでは田舎の普通の小学校に通っていた。

特に故郷には未練もなく、どちらかっついていえば学園都市、というより超能力に憧れの様な感情を持ってやって来た。

だが現実には甘くなく、さっきも言った様に俺は“真の”無能力者だ。

最初はショックも少しは受けたが、今となつては気にしていない。

そんなこんなで今に至る。「ふあゝあ」

7月12日

「めっさ寝みい…」

ここは学園都市第七学区のとある高校。つい数ヶ月前に高校生になったばかりの神道表裏は机に肘をつきながらつまらなそうに英語の授業を聞いていた。

というのも表裏は英語が苦手で、昔「一生鎖国してた方がいいかもしれない」と言われた位だ。

「おい、神道。ここの文章和訳してみる。神道、聞いているのか」

「あつ、ええゝつと、」

キンコーン

「もういい。次回までに和訳しておけ。あてるからな。今日はここまで」

「起立、礼」

「「「ありがとうございます」」」

その後休憩時間

「英語とか分かるかつーの。マジふざけんなし」

あゝあという感じで机の上に目を閉じてべちゃーっと顔をのせる。

その時少し後ろの方でいつものばか騒ぎが聞こえた。

「つぶね」。さっきの問題俺わかんかったんだよね」

「あれだにゃー。万年不幸のカミヤンでもたまにはツイてるってことだぜい」

「いやいや土御門君。そう決めつけるのはまだ早いで」

「どうしてかにゃー？」

「だってカミヤンですよ？どうせ次回あてる時にはカミヤンになるに決まってるますやん。それで不幸だと言っていると近くの女の子からいつものお礼とか言われて教えてもらって、なんやかんやでいい雰囲気になるんやで」

「おいお前ら。いったいどんな目で俺を見てるんだー！」

ギャーギャー 表裏はこのばか騒ぎを今にも眠りに落ちそうな頭で（確かにあのクラスの三バカ「デルタフォース」みたいなことになるかもな）と考え、とうとう眠りに落ちた。

そして目が覚めた頃には、さっきの騒ぎも次回までの課題もすっかり忘れていた。

とある話の休憩所

作者「初めまして。作者のNinnoです」

表裏「この話の主人公の神道表裏です」

当麻「ども。とある魔術の禁書目録の主人公の上条当麻です」

美琴「…」

作者「あれ？あの～自己紹介を」
バチッ

作者「うわつとと！？どうなさったんで！？」

美琴「なんであのバカの出番はあってこの私の出番がないわけ？」

作者「いや～出すタイミングなくて（汗）でも次は出す予定あるんで許してくれませんか？」

美琴「しょ～がないわね。分かったわよ。ただし1回焼いてからねッ！」

作者「へっ！？ちよつまっT（ry」
ズドン

作者「ぐがつ！……」

当麻「おーい。御坂もう進めてくれないか」

美琴「そつ、そんなのアンタに言われなくても分かってるわよッ…とある科学の超電磁砲主人公の御坂美琴よ」

表裏「…このコーナーは端的に言つと作者の気晴らしと詳細説明の為にあるコーナーです」

当麻「今回はこの話の主人公、神道表裏について説明していくんだっけ？」

美琴「そうらしいわね」

当麻「じゃあ神道説明よろしく」

表裏「めんどくせゝから作者に言わせたかったんだけど」

当麻「今あいつ瀕死状態だから諦めろ」

美琴「なっ、何よ！私のせいなの？」

当麻「明らかにお前のせいだろ！」

美琴「なんですってゝ」

表裏「…だらだらしてると後でNinnoに怒られて面倒なことになるから進めるけど、かといって言葉で説明するのめんどいからこれみてくれ」

無能力者

中学校に上がる前に親の都合で学園都市に来た

毛が濃くおっさんや泥棒と言われた事も

性格は相当な面倒くさがり屋で極度の人見知り

特にこれといった趣味もなく何も無い時は大抵寝ている

特技はなし

得意教科は数学と物理

不得意教科は英語、古典、美術、体育

ごくまれに訛るが訛りを指摘されると結構恥ずかしいらしい

当麻「なあ神道」

表裏「何？」

当麻「言ってて悲しくなんねえか？」

表裏「黙ってる（泣）第一全部作者のせいだろ」

作者「…」

美琴「…いつまで寝たフリしてんのよ。さっさと起きなさいッ！」
バチン

作者「うわっと！すみません許して下さいっ」

美琴「分かればよろしい。…でなんであんな酷い設定にしたのよ」

作者「え〜っと」

表裏「まさかとは思うけどお前自身がベースとか言い出すなよ？」
ギックウー

表裏「ギックウーじゃねーよ！ふざけんな！」

作者「いや〜。そう言っても書きやすくするには過去の自分をベースにして主人公にした方が楽かな〜って」

表裏「だからってここまで酷い設定にしなくてもいいべだ！」

当麻& a m p・美琴「べだ？」

表裏「ツツ！あ〜もついい！次の章とつとといくぞ！」

当麻& a m p・美琴（あつ逃げた）

作者「っていう事で第1章始まり始まり」

表裏（Ninno）ちょっと向こうで “ 楽しく ” お話しようか
ボソッ

作者「はは…（汗）」

第1章 幻想御手 Level Upper

1

7月13日

「はあゝ。すっかりやるの忘れてた」

当然の事ながら昨日言われていた英語の事である。結局デルタフオースの言った様な表裏にとつては嬉しい（当麻にとつては不幸な）事は起こらず、今は普通に居残ってる。

「なんでこんな時は上条当麻にあたらねゝのかなゝ。はあゝ。…まあいいんだけど」

当麻の両親は息子のこのような扱いに心を痛めているのだがそんな事を表裏が知ってるはずもない。

「めんどくせーけどしょうがねーからやっか。はあゝ」

一時間後

「ふうゝ。なんとか終わったしとつと帰っかなゝ」

余談だがこの間にやってたことは英文2つを訳しただけである。文章2つではなく文2つ。行にして3行。本人は結構真面目に頑張ったので笑ってはいけない。

神道表裏は超貧乏学生だ。実のところ高校に入る事すら大変だっ

た。

（といっても学力的な意味ではなく、金銭面での問題だ。英語あんななのにとかわれても、中学生時代は数学と理科でこり押しして中の中位には留まっただけで、高校入試も総合的には結構問題はなかった）

そんな訳でバスに乗れる程の金銭的余裕はないので基本歩きで登下校する。

「そーいえば」

と何かを思い出した様に走り出した。着いた場所はとあるスーパー。

「食料すっからかんだっただ。何か安いのが買えるか」

10分後スーパーの袋と段ボールをもって出てきた。

「まあこんなものでいいか」

買った物はもやし約1？、そうめん段ボール1箱のみ。買った理由は安く調理が楽だから。量を最重視しその他は考えてない。

部屋は6階。丁度当麻の部屋の真下に位置する。

そして帰ってそうそう料理を始めた。

5分後完成。出来た物は春雨風もやし炒めとそうめんの醤油和え。
「まあこんなもんか」

夕食をさつさと済ませるとパソコンの主電源を入れた。

「今月は余裕あるし、久々に音楽でもダウンロードすつか」

何度も言うが神道表裏は食費すら惜しむ程の超貧乏学生だ。そんな奴がなんで金のかかるダウンロードをするのかというと、寝る以外の気晴らしは音楽を聴くかゲームするしかなかったためである。カタカタカタスーッカチッカチッ

「んゝ。あんま良いのねゝなゝ」

カタカタカタカタカタカタスーッ…

とその時、

「ん？なんだこれ？隠しリンクか？」
カチカチッ

そして、画面にはこう表示されていた。

TITLE: Level Upper
ARTIST: UNKNOWN

「…レベル…アッパー？なんだこれ？」

いくら英語に疎い神道表裏だとしてもこの程度は理解出来た。

「レベルアッパー…レベルを上げる…？まさかな」

とは言ったもののどうしても気になってしまい、とうとうダウンロードしてしまった。

だが、

「思わずダウンロードしちゃったけど使うのはヤバイかな。コンピユータウイルスとか洗脳とかだと嫌だし」

とりあえずこの日はもう寝ることにした。

2

7月14日

神道表裏は昼食をとり、何時もの様に昼寝をしようと机の上に伏せていた。因みにレベルアップはまだ使用も削除もせずに残っている。

そんな表裏が窓側にある自分の席でウトウトしていると、

「でさ、知ってるか？なんでも使うだけでどんな奴でも簡単にレベルが上がるレベルアップっていうモンがあるらしいぜ？」

「ああ聞いたことある！でもあれって虚数学区とかと同じ都市伝説みたいなモンだろ？」

「まあそうなんだけどな。でもあったら簡単にレベル上がるんだぜ？俺記録術の単位ヤバくてさ」

「マジで！？俺はなんとか補修は避けられそうだぜ」

「マジでか！いいなあ」

神道表裏は起きていた。というよりある一言を聞いて目が冴えてしまった。

(…レベルアップ…：使用者のレベルを簡単に上げるアイテム…)

昨日の夜、偶然手に入れた謎の音楽データ。

神道表裏は自分の左の内ポケットから“それ”を出して眺めていた。

(もしレベルアップが噂通りのもので、これが本物なら俺も能力者になれるかもしれない…試してみる価値はある…か)

そしてこの日、神道表裏は初めて能力を手に入れた。

7月18日

神道表裏は第七学区にある洋服店『セブンスミスト』入口付近の群衆の近くを通りがかった。

どうやら聞く限りでは最近巷「ちまた」を騒がせていた連続虚空爆破「グラビトン」事件が起こり、そこを常盤台の超電磁砲「レールガン」が事件を解決したらしい。

（超能力者「レベル5」の電撃使い「エレクトロマスター」…常盤台のエース、御坂美琴か）

神道表裏はあれからもレベルアップパーを使用し続け、現在は強能力者「レベル3」程になっていた。発現した能力は電撃使い「エレクトロマスター」。事件を解決したらしい超電磁砲と同じ能力である。

神道表裏は夕食を食べ終え、寝転がってレベルアップパーを聞いていた。

（この日のメニューはもやし炒め焼き肉のタレ味に粉そうめんを混ぜたもの）

「初めて能力が使えた時は驚いたけど、段々慣れてきたかな」

能力が発現してから神道表裏は気分が良かった。

神道表裏は自分から学園都市に来た訳ではないがそれなりに超能力に憧れはあり、経験上無能力者は良いことがないことも知っていた。

夕食が完成し、レベルアップを聞きながら食べる。

「やっぱ能力あるっていうのはいいモンだな。徐々にだけど制御出来る様になって来たし」

そう言いながら目にかかる程に伸びた髪から火花を散らした。

「それにしてもマジでレベル上がるとはな。発電自体はショボイけど他は強能力者「レベル3」クラスだし。それに何となく音波と光波、電波とかの電磁波も感じれる様にもなってきたし…んっ…」

そんなことを呟いていると、瞬間、酷い頭痛のような痛みを感じ、そのまま気を失った。

4

神道表裏は昔のことを夢で見ていた。

小学生の頃、神道表裏はよくイジメを受けていた。その事はいく覚えていて、今でもよく思い出す。

確か三年生か四年生の頃からだったろうか。その頃の神道表裏は体力面では年下の女子にすら負けるほどで、ルックスも悪くキモいという事をそのまま表したようなあだ名をつけられたり、靴を隠されたり。挙げ句の果てには窃盗犯にすら仕立てあげられたこともあった。

その後中学校に上がる前に学園都市に来て少しはマシな学園生活を送れるかと思っていたが、“真の”無能力者というレッテルはそんな希望すら打ち砕いた。

能力者には見下したような扱いを受け、無能力者であっても言葉責めや暴力を受けた。

そんな扱いを受け続けてもスキルアウトの様にグレなかったのは慣れか、はたまた諦めか。

だが、いやだからこそか。この街でも何の力もない自分を憎み、能力者に憧れを持っていた。

力が欲しかった。ただ力が欲しかった。誰かに向けて復讐の為に力を振るうのではなく、自分を変え、また、自分の様な者をこれ以上出さない為に誰かを護る力が欲しかった。ただそれだけだった。

「でもさ、だったらもう一度頑張ってみよう。こんなところでクヨクヨしてないで、自分で自分に嘘つかないで！もう一度！！」

その瞬間、身体中に優しく力強い何かが駆け巡った様な気がした。

その時、誰かの声が聞こえた。

5

神道表裏は起きた時には病院の個室のベッドの上にいた。

周りを見渡すと点滴やらなんやらの医療機材があった。

（それにしても、さっきのアレはなんだったんだ？何か夢にしてはおかしい様な気が……）

そんなことを考えているとカエルの様な顔の医者が出てきた。

「目が覚めたみたいだね？どこか調子が悪いとかないかな？」

「いえ。何で病院に？」

「君、レベルアップを使っただろう？その副作用みたいなもので昏睡していたんだね？」

神道表裏は誰にもレベルアップの事を言った覚えはないので疑問に思ったから聞いた。

「何でその事を？」

「君以外にも被害者がいてね？そういえば君は危険な状態だったよ？」

「え？」

「実は7月20日の夜に君の上の階で能力者による放火事件があったね？その時巻き込まれた人がいないか各部屋をみて回ったら君が倒れていたって訳だね？多分それがなかったら君は餓死していたかもしれないね？」

7月20日。この日にとある高校生がルーンの魔術師と戦っていたことは誰も知らない。

「7月20日って…確か記憶にあるのは7月18日の夜までだった様な…」

そう思うとゾツとする。確かに丸2日間も飲まず食わずは危険だ。

「それに君は元から栄養失調気味だったみたいだしね？発見した時にはかなり衰弱してて、仮死状態だったんだね？だからあと数日間入院してもらうよ？」

そんなことを言っただけで医者は出ていこうとしたが、何か思い出した様で振り返った。

「そうそう、言い忘れてたけど能力は元に戻ってるはずだよ？」

それじゃお大事に、と言っただけで医者は出て行った。また一人きりになった個室で一人考える。

（レベルアップ…使用者に能力を与える代わりに副作用として昏睡状態になるアイテム…か…：努力しねーで手に入れるっていうのはやっぱりダメなんだな）

そして、ある一言を思い出す。

「もう一度頑張っただけか…」

言葉にしたとき不思議と身体の内からなにかが湧き出る様な気がした。

そしてふっと笑い一言呟いた。

「諦めずに。面倒くさがらずに。一回努力してみっか」

そして神道表裏は新しい希望を刻み、新たな人生を歩みだす。自

らの願いを叶える為にも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8319p/>

とある都市の薄幸少年[サッドボーイ]

2011年1月4日04時23分発行